

全譯ならず、比較的重要ならざる部分邦人に興味薄き部分はこのを省略し、又間々抄譯と認めらるゝ箇所少なからざれども、達意を主とせる文體はよく原著の旨趣を傳へて些の遺憾なきものと思はる。由來泰西學者が佛蘭西革命以前の歐洲史に於いて見事に成功せる如き、秩序整然たる統合的編述を以て、十九世紀以降の最近世史を取扱はんとするは至難の事に屬す。ましてや近時史界の趨勢たる文化史的態度を以て、生活諸相の統一的把握を試み時代の一般精神や主潮傾向を説かんとするは、寔に其困難測り知るべからざるものあるなり。本書はこの難事を遂行し學界の缺陷を補へる述作として推奨するには聊か躊躇すべきものなれども、兎に角類書中の白眉として將た最新の編述として一般讀書子の繙讀を薦むるや切なり。〔植村〕

●琉球伊波貝塚發掘報告 大山 柏著

大正九年四月琉球地方旅行の際同地中頭郡美里村伊波の貝塚の一部を發掘調査して良好なる結果を收めたる大山公爵がこれに關する一切の起録と研究の結果とを網羅

して學界に提供せるものを本編とす。

記述は先づ發掘の動機よりはじまり、次に遺跡の地形と其の現状、發掘の經過、貝層の狀態と遺物の關係の諸項に亙り、四枚の實測圖を用ひて精細に録する處あり、第五章遺物の研究に於いては、これを土器、石器及び石類、骨牙器、貝器等に分ちて一々に就いての客觀的の記載と共に著者獨自の研究を録し、伴出の獸骨、魚骨等に就いては石川、岸上兩博士、貝殼に關しては岩川教授の調査成績を紹介してすべてに遺漏なからん事を期せり。此の遺物の研究は蓋し本編の骨子たるものにして、全冊の七分をこれに割き、特に土器に就いては「昨年の考古界」にて紹介する處ありし著者の新考案になる紋樣論を以て、其の性質の推究を試み、我が有史以前の各種の土器中に占むる處の位置を決定するにつゝめたるは注意に値す別に卷末に獨逸文にて梗概を録し、また同地天願貝塚其他に關する附録あり。

著者の記述に依るに本貝塚は其の性質に於いて嚮に東京大學の松村瞭氏の調査發表せる同島萩堂貝塚に極めて近似せること明なり。これは琉球の史前研究上興味多き

事實にして、今や内地の史前遺跡の研究が空前の盛況を呈するの時に當り、關係淺からざる同地の遺跡の精密なる記録の相次ぎて公刊せられたるは學界の幸慶に云ふ可し。

本書四六倍版、本文五十枚、圖版卷首五枚、卷末二頁大の圖二十二枚、附録十數頁にて、全部石版刷りより成り、圖版の如きは一見彼のモールス氏の大森貝塚編を思ひ浮ばしむるクラシカルのものなり。これを本文の極めて新しき科學的の見解を示せるに對照せば興趣を覺ゆ。(非賣品、大山氏印行)

●三重縣に於ける彌生式土器並に

石器發見の遺蹟調査

三重縣名勝舊蹟天然記念物調査報告の第三冊として印行せられしものにして、調査委員、三重縣津師範學校の鈴木敏雄君の稿する處なり。初に總論として同縣下に於ける有史以前の遺跡の分布及び遺物の特色に關する記載を試み、次に各遺跡實査を題して桑名郡の諸遺跡中、特に大山田村新田と桑名町大字傳馬町とにある二個の彌生

式系の貝塚に關する詳密なる調査を以てせり。而して一に著者の考説を附す。

今其の記述を通觀するに遺蹟遺物を記する處、客觀的態度を以て正確なる事實を學界に提供せんことを著者苦心の痕を認むべく、編中例へば土器壺の口部を以て誤りて器蓋とせるが如き(一九頁)、また竈印を以て古代文字と解するなど(三二頁)二三の議すべき點なきにあらざるも、記述概して穩當、以て同縣下の史前の狀態を見るべき好文字と云ふを得。但し著者が其の總説の考説に於いて、一方地名の考證より同縣下に古くアイヌ族の分布せりとの確信を以て、從來調査されし遺跡のすべて彌生式土器の系統に屬し、他の史前の土器の發見せられざるに對比して彌生式土器即ちアイヌの遺せるものなりとせる新説に至りては廣く全國に亙れる考古學上の示せる事實よりして學界の認容を得るに難かるべく、またこれを考古學の研究方法上よりするも當を得たるものと信する能はざるなり。本書、菊判假綴、本文四十八頁、網版、石版等の附圖十七枚を添ふ。(非賣品、三重縣發行)

●鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡

大正十年度より調査の事業を開始せる鳥取縣の史蹟勝地調査報告書の第一冊にして、遺跡の最初に來るべき有史以前のそれに關する綜括的記述なり。本編は調査委員たる京都帝國大學文學部考古學教室の梅原末治氏が、足立、木山、太田三委員の蒐集せる資料を緯し、自己の調査を経して縣下の主要なる遺跡に關する正確なる記述を學界に提供するに共に、廣く現時の我が史前遺跡研究の成果に對校して、其の占むる位置と性質とを論ぜるもの、初に委員の調査に依りて知られたる因伯二國に於ける遺跡及び遺物の發見地點を挙げ、次にそれ等が遺跡としての特質を考查して、該地方に多き砂丘上の遺跡の性質と貝塚の存するなきの因由とに論及して、以下六章に亙りて、石鏃と共に銅及鐵製の小形鏃を出す因幡濱坂同湖山の二遺跡をはじめ同國青島、伯耆社村、縣下の遺跡を代表するの觀ある伯耆逢坂附近、同高麗山麓一帶の二遺跡に就いて、其の一々の地形、遺物發見の状態と出土遺品に亙り、二十餘枚の圖版と十數個の挿圖とを用ひて

精細なる記述を試み、單に遺跡のみならず出土遺物の性質を明にせる後、其の内より特徴ある彌生式土器、挾入石斧、石庖丁、石劍、石棒、玦狀耳飾、子持勾玉の類を抽出し來りて、一々の遺物に就いて作製せる集成圖と對照して是等の性質を論じ、これを綜括して因伯の遺物の示す處、其の遺跡が大體に於いて彌生式系統に屬せるものなるを示せるもなほ繩紋土器系の痕迹の存在するを注意せり。第十章の考説は近時斯界の進運の齎せる業績に基きて、縣下遺跡の實年代の推定を試み、其の彌生式遺跡は南韓の史前遺跡と密接なる關係を有して、日本人の大本をなす民衆が同代大陸より韓半島を経て廣く内地に移住せる際の一の移動の経路に當れるを想定せしむるものなりと云へり。

以上は本編の梗概なるが、本文四六倍判百頁の中には隨所に著者の史前遺物に關する見解を示せるあり、例へば遺物の章中玦狀耳飾を論じて、古式の古墳より金鏢の出土なき事實より其の形式系統に關する疑問を提出せるが如き、また子持勾玉を以て金石併用時代のものとして、一種のアミュレットと解せるなきは、遺跡の年代に關す

る見解と共に學界に一説を提起せるものとして注意を惹くべけむ。因に本冊は非賣品なるも特別の希望者は實費五圓を以て同縣社寺係より頒布せらるべしと云ふ。

(鳥取縣發行)

●富山縣史蹟名勝天然記念物調査會

報告 (第三號)

大正十年三月以降時々發行し來れる菊版雜誌體の冊子にして、其の第三號たる本冊は口繪寫真版三枚、本文三十六頁より成り、載する處委員大村正之氏の氷見郡大境洞窟住居趾、同御旅屋太作氏の庄川産葦附苔、同九里愛雄氏の下新川郡境關所趾及び下新川郡愛本橋なる四編の報告なり。是等の諸篇は記述何れも平易にして、大村氏の氷見大境洞窟の報告の如きも、此の有名なる遺跡に關する小金井、佐藤、柴田、松村諸氏の發表せる研究を平易に書き改めたるもの、従つて一般地方人士に史蹟其他の概念を與ふる目的よりせば適當の冊子ならむ。但し縣の調査報告としてこれを見る時は記事稍通俗に過ぎ、氷見の如き特殊の遺跡に就いて一葉の實測圖すらなきはい

さゝか物足らざるの感なきにあらず。第四號以下印行の際に委員の一顧を望む。(非賣品、縣廳發行)

●滋賀縣史蹟名勝天然記念物

調査報告概要

滋賀縣保勝會が風光明眉、史蹟に富める縣下の名勝、史蹟、天然記念物調査保存の目的を以て創設せられたる大正九年六月以降、同十一年九月に至る三ヶ年間に於いて、委員諸氏が其等に關する調査の結果に依る報告の概要を録せるものなり。菊判本文百三十八頁の冊子にて、載する處、古墳、宮址、寺址、墳墓、城址、石佛等史蹟に關するもの百三十五ヶ所、名勝十三ヶ所、天然記念物三十五件あり、記載全縣下に亙りて、各項の主要なるものを網羅し、解説は簡單ながら要を得て、近江一國の史蹟名勝天然記念物の一斑を髣髴し得るに庶幾し。たゞし一々の細目に就いて見る時は比較的價值少き遺蹟の錄せられ、一層重要なものゝ脱せる例あるが如く、吾人の氣附けるものに、滋賀郡和邇村大塚山の宏壯なる前方後圓墳の項目なく、また栗太郡瀬田村南大萱の新作大鏡の

銘ある漢式鏡を出せる古墳の見當らざる如きは僅にその一二例にして、また縣下の各地例へば滋賀郡南滋賀村、東淺井郡朝日村等にある有史以前の遺蹟に關する項目の缺如も著しき一に數ふべきならむか。是等は今後委員諸氏の調査を望むと共に、更に上に舉げられし諸項に就いても概要以外に各の詳細なる調査報告の引續いて公にせられん事を期待するものなり。

(非賣品、滋賀縣保勝會發行)

●博物館陳列品圖鑑 (第三輯)

朝鮮總督府博物館所收の優秀品を蒐めたる圖鑑にして體裁の菊二倍版なること既刊の二冊に同じく、收むる處平安南道大同江面の樂浪古墳發見の博山爐、奩、四神鏡、支那喀喇和卓發見の騎馬土偶、朝鮮梁山出土の金銅製冠扶餘陵山里的傳百濟王陵の壁畫摹寫圖、羅州潘南面發見の甕棺、平安北道雲山出土の高句麗時代の鐵製焔爐、葛項寺東塔、新羅時代の彌勒石像、高麗初期の鐵鑄釋迦座像及び開泰寺の鐵釜の十二葉にして、各葉に和英兩文の簡潔なる解説を附す。印刷は大部分玻璃版なるも、騎馬

土偶、扶餘の壁畫等は原色の面影を傳へんが爲に三色版を以てせり。是等の資料は大部分「朝鮮古蹟圖譜」編纂以後の發見に係れるを以て、近時に於ける半島古蹟調査の業績の著しきを示すものなると共に、また前者と併せ見て其の藝術の研究の上に資する處多し。

(價不詳、總督府博物館發行)

●古瓦譜

小川白楊編

京都の好事家小川白楊君が三十年來嗜味を以て蒐集せし各地の古瓦中、約百個を撰びて、これを原寸の大きに撮影し玻璃版に附して知友に頒てるものを此の古瓦譜となす。收むる處飛鳥期に屬する法隆寺、飛鳥寺等の遺品より奈良、平安、鎌倉の各時代を通じ下は桃山期に及び花瓦、疏瓦、鬼板等の各種類に亙れり。然れども中に平安朝期特に其の大内裏、六勝寺の古瓦は最も豊富にして且つ優秀なる遺品あり、從來の古瓦圖錄の奈良朝及び其の以前を主とせるに對して一特色を示せり。本書和紙刷、絹表裝幀入の大本にして、初に内藤博士の題字、天沼博士の序文を添ふ。しかして印刷は特に意を用

ひたる處にして其の大内裏の碧瓦の如きは碧色に刷りなして原品を髣髴するに近きものあり、最も欣ぶ可しきなり。(非賣品、小川氏印行)(以上梅原)

彙 報

● 史學科學生見學旅行

十一月四、五兩日を期して喜田教授指導の下に大和飛鳥地方に見學旅行を行ふ。参加者は助手學生十五名なり。

四日正午京都驛を發し、奈良に下車して約一時間自由行動を取る。數名の者は博物館に到り折柄展覽の諸曼荼羅を一覽し、再び乗車して眞屋造りの村落古墳所々に散在する大和平野の東端を南走し、大和神社崇神天皇陵三輪神社等を車窓より拜し、飛鳥三山に迎へられて櫻井譯に下車す。かくて阿倍文殊に到り、丸塚三個を見る。一つは屋根形石棺を存し、他の二つは石室のみなれども、其大なる物は羨道約二丈五尺、玄室一丈六尺あり、切石

を以て築ける頗る精巧なるものなり。附近の文殊院及白山神社に參ず、同社は特別保護建造物なれども、屋廡大破に及ぶ。これより山田大寺の金堂及塔の礎石、久米寺奥院の塔の礎石を検し、十六夜の月に照され、萬葉の古を偲びつゝ、飛鳥街道を辿り、午後六時半頃岡、藥屋旅館に投ず。

翌五日、午前七時半頃旅館を辭し、島庄の大古墳石舞臺に上り下つて玄室に入る。室の長さ二丈五尺幅一丈なり。石の大なる事實に人目を驚ろかす。岡寺に到り、聖造の如意輪觀音を拜し、寶物を拜觀し、開山義淵僧正の墓に詣で、飛鳥平原を望む。下つて奇石酒槽を見、飛鳥神社、飛鳥大佛を拜し、右に雷岡、左に甘藷岡を眺め、飛鳥川に沿ひて下る事數町、推古帝豐浦宮趾に到り、向原寺に參じ、更に川原寺趾に到り、弘福寺の瑪瑙の礎石及塔趾を見、橘寺に到り二面石及大塔礎石を一覽す。山を攀じて萬蒲池古墳に到る。玄室小なれども内面に漆を塗れる精巧なる屋根形石棺二個を安置す。下つて鬼祖、鬼廟を見る。天武持統兩帝合葬陵を遙拜し、前方後圓の大なる欽明帝陵及吉備姫王棺隈墓に詣ず。墓前に數個